

## 普遍的類型としての小説理論？

### — Fr. シュレーゲルの小説理論における小説反対論の影響について —

北原 寛子

#### 1. 近代小説理論形成の一過程としてみたフリードリヒ・シュレーゲル

本論<sup>i</sup>は、フリードリヒ・シュレーゲル初期の小説理論についての考察である。しかしこの課題については、これまでにすぐれた研究が数多くあり<sup>ii</sup>、必然性に疑問が呈されるかもしれない。しかしそれにもかかわらず今回あえて取り上げた理由は、シュレーゲルの初期のテキストが近代の小説理論の形成において大きな役割を果たしているため、その影響関係に注目したいと考えたからである。1800年前後のフリードリヒ・シュレーゲルの小説理論はどのように位置づけられるのか、先行するテキストからどのような影響を受け、彼の後にどのように引き継がれたのかについて考察を進めていきたい。

本来シュレーゲルのテキストがのちの小説理論に与えた影響について考察するためには、シュレーゲルの当時発表されたテキスト全体を研究対象とすべきであろう。しかし、彼の著作は膨大であるため、絞り込んで分析したい。本論では、「ギリシャ人とローマ人 古典的古代についての歴史批判的試論」*Die Griechen und Römer. Historische und kritische Versuche über das klassische Altertum* (1797)から「ギリシャ文学研究」*Über das Studium der Griechischen Poesie* (1795-97)<sup>iii</sup>を中心に分析し、適宜断片集など他の著作を参照にした。

なぜ「ギリシャ文学研究」が考察の中心になるのか、その理由は、内容や先行研究の指摘などを参考にしたうえで、彼が他から受けた影響と、他に与えた影響がもっとも顕著に表れていると判断したためである。彼が影響を受け、それがそのままのちに引き継がれているとすれば、彼はただの通過点に過ぎなかったであろう。しかし彼が受容し、消化して発信したことで、文化的に大きな意味を獲得したことがある。それは例えば、ヘルダーが『人間性促進のための書簡』*Briefe zu Beförderung der Humanität* (1793-97)において提唱した普遍的形式としての小説という発想にたいして見られる現象である。<sup>iv</sup>ヘルダーは「小説ほど包括力のある文学のジャンルはほかにない。とりわけ、小説はきわめて多様な編纂が可能である。というのも、それは歴史や地理、哲学やほとんどあらゆる芸術分野の理論のみならず、すべてのジャンルの文学を含み、含む可能性をもっている—散文で」<sup>v</sup>と述べている。シュレーゲルはそれを受けて、アテネウム断片116番 (1798)に「ロマン的文学は進歩する普遍文学である。その使命は、すべての分裂した文学のジャンルを再び統一し、文学を哲学や修辞学に接近させるだけではない。それは文学と散文、独自の作品と批評、人為的な文学と自然の文学を混ぜ合わせ、溶け合わせようとし、またそうすべきなのである。文学を生き生きと社交的にし、生活と社会を文学的にし、機知を文学にし、芸術の諸形式をあらゆる種類の手堅い陶冶の素材で満たし、ユーモアの振動で活気づけようとし、またそうすべきなのである」(KFS II 182)と記述している。18世紀には、小説が歴史とどのよ

うに区別されうるのかということが問題となっていた。歴史の記述が空想の混入を徹底的に拒否し、近代的な学問として成立したのはようやく19世紀初頭になってからで、1790年代はなおも小説と歴史の違いについて議論が続いていた。小説は一方で形式のあいまいさから、文学としての価値が低く見られる傾向にあった。ヘルダーの提唱する小説像は、小説の弱点と思われていたあいまいさを逆手にとり、より包括的な芸術の枠組みとして正反対のイメージを提供した点で斬新といえる。シュレーゲルはその点を継承して、小説が多様なテキストの特徴を内包する可能性を積極的に打ち出してロマン主義文学の根幹に据え、文学の一ジャンルとして広く認知されることに貢献したのである。

シュレーゲルはヘルダーの打ち出した小説像を、ほぼ改変することなく受け取りつつ、鋭く端的に表現することによってより広範に普及させた。この影響関係はいわば直線的と呼ぶことができるであろう。それにたいして、本論は曲線的とでもいうべき影響関係について考察したい。シュレーゲルを経由することによって、小説とは無縁であったり、積極的に擁護したりしてはいない意見が、小説賛成論へと変化している例が、つまり元のテキストの論旨が入れ替わっていく場合が存在するのである。以下、この点について確認していくことにしたい。

## 2. シラーとシュレーゲル

シュレーゲルを経由することで、本来小説理論でないものが小説理論として読まれていく現象は、シラーとの関係において認められる。これまでのロマン派文学研究において、シラーとシュレーゲルの関係については、もはや古典的なテーマといっても過言ではないであろう。今回は、両者の個人的な関係には立ち入らずに、それを超えた文化的な文脈の中でテキストの関係を確認したい。批判版全集第二巻の前書きで指摘されているように、シュレーゲルの「ギリシャ文学研究」は、フリードリヒ・シラーの論文「素朴文学と情感文学について」Über naive und sentimentalische Dichtung (1795-96)<sup>vi</sup>の影響を受けている。2つのテキストの発表は1796年でほぼ同時期である。その後シュレーゲルが1797年になって書き足した前書きの中には、シラーの論文のタイトルが挙げられている (Vgl. KFSA I 209)。どちらの論文でも、古典古代のギリシャ文学と、彼らが生きた時代の近代文学が比較されて、新旧論争の体裁をとって論じられている。2人の関係が必ずしも円滑であったとはいえなかったように、近代文学支持のシラーと古代文学支持のシュレーゲル、と両者が対照的な態度を取ったようにとらえる見方もあるが、基本的に両者のテキストは、その道筋は独自であり、異なっているものの、方向性に類似がみられる。<sup>vii</sup>いずれのテキストにおいても、文学の新たな展開に寄与するために、古典古代の文学を再検討していると読むことができる。両方のテキストにおいても、小説に限定することなく文学とは何かが問われ、文学全般について論じられている。両者の関係を際立たせるために、第一に文学の定義について、第二に文学論から発展して詩人を考察している部分をそれぞれ取り出し、分析していきたい。

最初に、シラーの総合的な文学観を確認しておきたい。彼は「あらゆる文学はつまり、内容に限りがあってはならない。それによってのみ文学は文学為りうる」(NA XX 469)と述べ、文学は無尽蔵の可能性が確保されているべきだと主張している。文学で描き出される内容は、因習や形式を超えて自由で際限のない広がりやを約束されているべきだと考えられているのがわかる。そ

して、「文学に与えられている娯楽という概念にたいしては、すでに見たように、あまりにも狭すぎる境界が引かれてしまうのが常である。なぜなら、一方的に感覚性がただ必要としていることに関連付けてしまうからである。まさに反対に、詩人が目指すべき高尚化という概念にたいしては、一方的にただ理念にしたがってこの概念を規定するので、あまりにも広すぎる領域が与えられるのが常である。／なぜなら、理性はその求めるところでは、感覚世界に必然的にそなわる限界に縛られることがなく、絶対に完成するまでは静止することがないので、理念にしたがえば、高尚化はつねに無限へと通じるからである」(NA XX 489) という意見を述べている。ここでもやはり文学は高尚化 *Veredlung* を目指して無限に展開する可能性があることが示唆されてもいるが、一方で娯楽的な作品という文学の亜種が想定されていることも読みとることができる。娯楽的な作品は文学の一部と見なされてはいるものの、より高尚に、より高貴に、より理想に近づこうとする動きとは異なり、感覚的なもの、つまり身体的な欲求と結び付けられることで、高みへの飛翔が阻害されると考えられているのである。

「素朴文学と情感文学」における素朴とは、あるがままの自然が人為的なものを恥じ入らせる高貴さを発する状態であり、情感とはその素朴状態を回復しようと無限の努力を重ねる状態であるとシラーは定義している。「素朴詩人にたいして自然は、いつでも分割されない統一体として作用し、いつでも自立した完全な全体であり、あらん限りの人間性を現実に表現できるように取り計らったものだった。情感詩人にたいして自然は、抽象化によって詩人のうちにわきあがる統一を己の中から再び作り出し、人間性をみずからのうちで完成させ、制限された状態から無限状態へと移行する力を付与した。というよりむしろそうするための活発な衝動を植え付けたのだった」(NA XX 473) と素朴文学と情感文学の担い手である詩人が自然と自己を対峙させる方法に従って、高尚で無限である方の文学にも二種類に分類されることが説明されている。この引用部分から、詩人論は文学論と区別されずに一体となって展開されていることが見て取れる。

そこで次に、シラーの詩人論に焦点を移していきたい。彼は「しかし、人間性の内にある絶対的なものは、天才の課題であり、天才の領域である」(NA XX 481) と述べ、文学の領域において期待される無限の可能性の追求は、天才 *Genie* と呼ばれる特別の才能の持ち主によって成し遂げられると論を展開している。続けて、「素朴な天才はこの領域を乗り越える危険はないが、もし外的な必然性や瞬間の偶然の必要を内的な必然性を無駄に費やして受け入れるなら、しかしそれをまったく満たすことができない。これにたいして情感的な天才は、必然的な制限を遠ざけるために努力して、人間的な性質を廃棄し、彼に許されていること、すべきことだけでなく、あらゆる特定の制限された現実を乗り越えてしまい、絶対の可能性に自らを高め、理想化するどころか、可能性そのものを乗り越えて夢想にふけるという危険にさらされている」(NA XX 481) と記し、素朴詩人、情感詩人それぞれで活動方法の違いを対照的に際立たせている。シラーの詩人論においては、ここにみられるように、詩人は作品を創作するという時点ですでに天才と考えられ、詩人の個人的な能力や素質についてさらに問うことはない。そこから先に進んで、詩人が自らのうちに潜む内的必然性によって行動する場合と、外的な要因から行動を迫られる場合に、創作活動の意識のあり方を問うているのがわかる。

次に、シュレーゲルの「ギリシャ文学研究」における総合的な文学観について検討してみたい。彼は、「文学とは普遍的芸術である。というのも文学の機関である想像力はすでに自由と区別し難いほど似ており、外的な影響には一層依存していないからである」(KFSA I 265) と主張している。別の個所でも、「外から力を借りてきたり、助けをえたりすることのない唯一の本来の純粹

な芸術は文学である」(KFS I 294)と文学の特徴を記している。彼は文学を、想像力という人間の内なる働きによって生み出された非常に精神的な活動と捉えていたことがわかる。意識から直接流れてくるために外部の影響を受けず、そのために純粋であり、優れていると主張している。シュレーゲルは文学について基本的にそのように定義しつつ、さらに近代文学と古典古代がそれぞれ独自の性格を有していると説明している。近代文学については、「特徴のないことが近代の文学の唯一の特徴であるように思え、混乱がその共通の基準であり、規則性のなさがその歴史の精神であり、懐疑主義がその理論の成果である」(KFS I 222)とその特徴を描写している。この部分だけを抜き出すと、近代文学はあいまいで不確かなものであるという否定的な評価を下しているように見えるが、「普遍的」universellという形容詞から連想されるように、これはやがて最初に挙げたアテネウム断片の「普遍文学」へ発展する思想の萌芽である。さらに、彼は「散文は近代人の本質的性質である」(KFS I 257)と述べているように、これが散文体文学である小説の定義へと導かれていく。近代的文学の特徴をなすあいまいさ、捉え難さが、小説においてはジャンル横断的で総合的な形式として積極的な価値へと転換されているのがわかる。

近代に対置される古典古代のギリシャは、「その(=ギリシャ文学)の黄金期は、芸術の完全な自己決定の理想と美の最高の頂点に達した。この頂きは何がしかの自然なBildungにおいて可能となるものである。その独自性は、人間性質一般をもっとも力強く、きわめて純粋で、明確で、かつ単純で、完全に打ち出している。ギリシャ文学の歴史は、文学の一般的自然誌である。すなわち、完璧で規範となる見解なのである」(KFS I 276)と描き出され、古典古代のギリシャに文学の理想的な状態が実現されていたと主張する。混乱に満ちた近代と、完成状態に達していた古典古代が、表面上は明快に対立するよう構成されていたのがわかる。

シュレーゲルは詩人についてどのように論じているのだろうか。今回とくに注目したいのは、先に挙げた引用にもあったように、彼が文学を論じる代わりに、詩人を論じ、さらに詩人や人間一般のBildungの問題を扱っている点である。Bildungとは、動詞「形成する」bildenの名詞形で、神が人間をどのように創り給うたのかというキリスト教的世界観を背景に、人間にたいして適用されるようになった語である。原義は身体の造形を指すが、同時に精神の形成、在り様、鍛錬にたいしても用いられるようになった。18世紀には人間は誕生時に神から与えられた能力以上に、自らを理想に向かって成長させられると主張されるようになり、Bildungの問題についても盛んに論じられるようになっていた。Bildungの日本語訳は「形成」「自己形成」「教育」「陶冶」などいろいろな可能性があるが、Bildungという語が本来備えている意味の広さを網羅することは出来ないのだから、本論ではあえてBildungとドイツ語のまま表記することにしたい。

シュレーゲルはなぜ文学論、詩人論でBildungについて触れるのか。その理由は、彼が「私たちの知っている人間というものは、少なくともこの世に存在するものだということを誰も否定はすまい。『文化、発展、Bildung』という言葉と結びついて常々言い表される不確かな概念は、2つの異なった性質を前提としている。1つはbildenされる性質であり、もうひとつは境遇と外的な状況がBildungのきっかけとなり、修正し、促進し、制止するのである。人間はみずからをbildenすることなく活動することはできない。Bildungはあらゆる人間の生活の本来の内実であり、変化するものの中で必然的なものを探し求める高次の歴史の真のテーマである」(KFS I 229)と考えていたからにはほかならない。人間はみずからをbildenすることなく活動できないので、文学にもおのずと人間のBildungが表れるはずである。この主張に文学論においてBildungが論じられる根拠を求めることができる。「近代文学の全体で個人というもの、特徴的なこと、哲

学的なことが非常に重視されていること以上に、近代的な美的Bildungの作為を説明し、確認できるものはないだろう」(KFS I 241)とも述べており、文学論がBildung論によって代替されていることを確認することができる。

シラーは、文学は人間を高尚にし、より高い存在へと引き上げると主張していたことはさき確認した通りである。同様にシュレーゲルも、人間の「完成」へと至る道を文学の中に見出そうとしている。「芸術と趣味の自然なBildungのこの究極の限界に、つまり美の最高の頂点に、ギリシャ文学は実際に到達したのだった。ひたむきな内なる力がすっかり放出され、目標に到達し、全体の調和した完璧さVollständigkeitがいかなる期待も満たさないことはない時に、完成VollendungとこのBildungの状態は呼ばれた」(KFS I 287)というように、「完成」、VollendungやVollständigkeitといった言葉は、シュレーゲルのこの論文の中に非常にたくさん見出すことができる。シラーも、シュレーゲルも、文学を通じて、人間精神を高みへと引き上げようとするイメージが共通している。文学が教育的な手段の一種であるという認識は、18世紀に広く見られた。シュレーゲルは、表面的にはギリシャ古典文学の完成された美を理想として賞讃しているように見えるが、人間精神の根本的な教育の問題と関連付けている点からして、あくまで18世紀的な、つまり近代的な関心から古代を捉えていたと言える。ギリシャは理想を仮託する対象ではあったが、シュレーゲルの軸足はしっかりと近代におかれていたということがBildung論から読みとれるのである。

では次に、シラー、シュレーゲルともに、彼らの発想の共通の基盤ともいえる文学を通じた教育という見解について、18世紀ドイツの事情を垣間見てみたい。

### 3. 教育的文学観の伝統

18世紀の代表的論客であるゴットシェートは、文化について、とりわけ言語と文学について多くのことを論じ、当時からすでに大きな文化的影響力をもった人物であった。彼は人間の趣味判断力Geschmackは後天的に教育によって発展させることが可能であるので、文学においては読者の趣味判断力の改善、改良に寄与する配慮がなされるべきだと主張している。読者によい趣味の見本を提示できるように、詩人自身が有能かつ有徳でなければならないと論を展開している。その中で彼は「ここで誠実な詩人は、みずからを徳のある素晴らしい存在として、つまり品行方正な男性の姿で好意的に描き出すので、それを見た人をみな自分に好意をもたせてしまうのである」<sup>111</sup>と述べている。この部分では、詩人の人格が扱われている。シラーやシュレーゲルが詩人の才能や教育について論じているのは、文学作品には詩人の人格が反映されているという発想が、彼らの以前から続いていたためであることがわかる。文学作品に詩人の人格が表れるという主張は、詩人の作為や技巧を想定していない論者の認識を反映していると言える。論者が文学作品を現実ではなく作者による虚構と認知していたとしても、つまり、現実と空想の絵空事の区別がきちんとしていたとしても、そこからさらにもう一段階、書き手の作為を認められるかどうかという虚構認識の近代化の過程があったことが観察できる。現在のわれわれは、詩人は自らを装うことができると信じており、彼らの作品は、たとえ詩人が想像し、創造したものであったとしても、彼らの人格と別個のものとして扱う。18世紀末から19世紀前半にかけて活躍したジャン・パウロは、文学作品においては悪魔が美しく描かれうることもあり、しばしば現実の価値が転倒す

ることがあると論じており<sup>x</sup>、これを現代的な認識が現れた事例と見ることができるだろう。18世紀のテキストは、虚構の世界を現実と完全に切り離れた現代的な認識にいたるまでにさまざまな過程があったことを伝えてくれている。また、この虚構の世界を客観化することを阻害していたのが、教育という道徳的な規範意識であったことも興味深い点である。

さらにゴットシェートは文学の教育的効果について、「というのも実際、文学は道徳的な教科書と、本当の歴史の中間を保っているからである。[...]しかし歴史は、それを読むことが教養のない人にとっても心地のいいものであるだけに、それは彼らにはあまり教化的ではない。歴史は単に、読者に向かないような特別な出来事を語るだけだ。[...]それにたいして文学は、道徳のように教化的で、歴史のように心地いい。文学は教え、楽しませる。そして学のある者にも学のないものにも適応するのだ[...]」<sup>x</sup>と述べている。文学は人々を教育するために有効な形式であると主張しているのがわかる。ただしここで注意しておきたいのは、この意見は小説ではなく、広く文学一般について述べられている点である。

次に挙げるテキストは、ブランケンブルクの1774年に発表された『小説試論』の一部である。ここでは文学全体についてではなく、小説に限定して論じられていることを注意しておきたい。

「詩人は、詩人の手段で巧みになせる方法によって、読者のうちに個人の完全さとその使命を促進することのできるイメージと感情をうみださなくてはならない」<sup>xi</sup>、あるいは「詩人は、楽しみを通して教えなくてはならない。そして読者のうちに個人の完全さとその使命を促進することのできる感情とイメージを生み出さなければならない。この時小説詩人は何を手にしているのだろうか。出来事と登場人物である。そして詩人が究極の目標に到達しうる手段にはそもそも何があるのだろうか。一まず楽しみである」<sup>xii</sup>と主張している。このように、詩人は楽しみを通して読者を教育し、読者を徳や正義に駆り立てるように努めなくてはならない、と繰り返し主張していることがわかる。「人びとの教師となるという正しい意図をもった詩人ならば、人びとの好みを理性的に構想するために、彼らが備えるべき知識を修得できるように手助けしなければならない。詩人は、彼らの徳や正義、親切心の感情を掻き立てるだけでは充分ではない。詩人は、われわれが人間としてそなえうる徳や正義への感情を、かきたてるよう努めなくてはならない。そして人間にふさわしい度合いで、そうした性質を備えているということで幸せになれるように掻き立てるよう努めなくてはならないのである」<sup>xiii</sup>とブランケンブルクは、小説は教育的でなければならないと何度も述べている。小説は読者を教育すべきものだという発想は、ゴットシェートでもすでに確認できたようにブランケンブルクの独自性によるものではなく、当時の文学一般が教育的役割を期待されていたために、小説も文学の一ジャンルとして芸術的であろうとするならば、必要最低限満たさなければならない基準でもあったと考えられるのである。

さて、再びシラーに戻りたい。「素朴文学と情感文学」でも、文学は教えかつ楽しませる、という規則が挙げられている箇所がある。「文学を考えると、2つの原則がある。それらはまったく正しいが、しかしいつも使われる意味ではお互いに帳消しにしている。第一の『文学は楽しいものでなければならない』という原則は、先に述べたように、文学的描写の無意味さと平凡さにたいして、少なからず好都合である。もうひとつの原則『文学は人間を道徳的に高尚にするために役立たねばならない』によって、極端さが擁護される。頻繁に口にされるが、しばしばまったく間違えて解釈されたり、不適切に使用されたりしている2つの原則を、より詳しく解明することは無駄ではないだろう」(NA XX 486)。シラー独自の点と思われるのは、たんに「教育」ではなく「道徳的に高尚にする」と具体的に言い直していることである。文学は人間を道徳

的に高めるためならば、現実には少々ありえないような、極端な状況を描くことが許されると書かれている。文学の教育的機能が、非現実的な世界を提示するという芸術としての特別の権利にも関連付けられているのは興味深い点である。

ここでまた、シラーの意見は、あくまで文学全般についてであって小説には限定されない点に注意を喚起しておきたい。1789年の「よい常設劇場はどのような効果を与えうるか」Was kann eine gute stehende Schaubühne eigentlich wirken?という論文では、演劇の教育的効果にも触れられている。「[...]『舞台はどのような効果を与えるのか?』—哲学と公的な機関の立法者だけが与えうる最高で究極の要求は、一般的な幸福の促進である。肉体的な生活の期間に含まれるものは、いつでもその第一の指標となるだろう。人類が彼らの本質において高めることのできるものが、その最高のものなのである。動物的人間の欲求は、より古くからあり、より切迫している。精神の欲求は、より卓越しており、無尽蔵である。舞台が人間と国民のBildungに影響することを反論の余地なく証明できる者は、その価値を第一級の国家機関と同等に認めるのである」

(NA XX 88)と、演劇は国家的教育機関として機能しうるのでと論じ、その文化的な意義を主張している。教育的な機能を果たすのは、文字化されたテキストに限定されることなく、演劇も同様に考えられていたことがわかる。芸術活動の正当性を主張する場合に、18世紀ドイツのさまざまなテキストでは、教育効果がその根拠に挙げられていたのであった。Bildungは文学に限定されない芸術と広く一般に結びつけられていたといえるのである。

#### 4. 普遍的類型としての小説理論?

シュレーゲルが文学による教育というテーマをどのように扱ったのかについては、先に彼のBildung論を確認したため、再び取り上げることは避けたい。彼は、表現上はギリシャ古典文学を賞賛しつつも、そこに18世紀ドイツの一大関心事であるBildungを織り込んでいた。彼にとっての古代は、近代の姿をよく知るための、いわば鏡のような役割を与えられていると出ることが出来るであろう。彼は文学全般について論じているが、それに近代の代表的形式としての散文という別の箇所でもなされていた主張を重ね合わせると、この主張の中には小説が含まれていると考えるべきであろう。

それに対してシラーは、文学全般について論じていた先の引用で確認したように、娯楽的要素の強い作品は、身体感覚の安易な充足を求めるあまりに、想像力の高みへの飛翔が妨げられていると考え、区別しようとする姿勢が見られた。この構図を、小説に当てはめると、状況は若干複雑である。彼の論文にはいくつかの小説のタイトルが挙げられており、表現された精神性を彼なりに分析して、セルバンテスは申し分なく文学たりえるが、シラーの同時代の詩人ハインゼのように留保される場合もみられるからである。

基本的に、いわゆる小説は、厳密な意味で文学から外れているとシラーは考えていたと言ってよいであろう。それは小説家を詩人の片親違いの兄弟と呼び、詩人にしか許されていない想像力の最大の発揮に与ることができないと主張している部分から読み取ることができる。<sup>xiv</sup>シラーは、小説は文学的想像力によって記述されるには不十分なジャンルと考えていたと言える。彼にとって小説と歴史は対立関係にあり、結果的に歴史を記述することを積極的に選択したのである。総じて、シラーは小説に否定的な立場をとっていたと言える。<sup>xv</sup>

シラーとシュレーゲルのテキストは、ほぼ同時期に成立し、表面的には対立しているように見えるが、内部の基本構造は類似している。だがそれにもかかわらず、細部はBildung観が織り込まれるか否かといった差異があり、複雑な関係にある。複雑だからこそ、小説に否定的な立場をとっていたシラーのテキストが、シュレーゲルと混同されることで、その後の小説理論に取り込まれていったのではないかと考えられる。この点について考察するために、モルゲンシュテルンのテキストに注目してみたい。

カール・モルゲンシュテルンは、ドルパート（今日のエストニア第二の都市タルトゥ）で弁論術の教授を務めていた。当時も今日もあまり有名な人物ではないが、それだけ一層シラーとシュレーゲルが当時の社会に与えた影響を測るために有効と言えるであろう。モルゲンシュテルンは、自らのテキストにシラーのテキストを引用し、以下のように述べている。「詩人が私たちに与えることができるものは、彼の個人だけである。[...] この彼の個人を出来るかぎり高貴にし、純粋で素晴らしい人間性へと純粋に高めていくことが、すぐれた人々を感動させることを企てることが許される前に、彼のまず取り組むべきもっとも重要な活動である」<sup>xvi</sup>。これはシラーのビュルガーの詩についての「有名な」批評の一部であると明言され、今日のわれわれもこの箇所をシラーの全集で確認できる。<sup>xvii</sup> モルゲンシュテルンは、それに引き続き「明らかに、この言葉で、編者は詩人の口を借りて、彼自身のBildungと完成Vollendungを語っているのだ」<sup>xviii</sup>と語り、文学には詩人の人格が表現されており、その表現で読者を教育しなければならないという、詩人の教育的役割を強調している。これは先に確認したように、18世紀から続く教育的手段としての文学、詩人の人格の投影としての作品という発想を、シラーのテキストを直接引き継ぐ中で同時に踏襲している。モルゲンシュテルンがこの論文で主張しているのは、シュトゥルム・ウント・ドランクの詩人、フリードリヒ・マクシミリアン・クリンガーの小説について、作者の人格に基づいた高い評価をなすべきだということである。シラーがビュルガーについて論じていた際は、叙情詩の形式的な優位性が主張されていたが、叙情詩の議論が小説の評価に移し変えられるという横滑り現象が認められる。これは、シラーとモルゲンシュテルンの間だけで発生したように見えるかもしれないが、ここにはシュレーゲルの小説に対する積極的な評価が触媒となって作用していると考えられる。なぜならば、この1817年の論文ののち、20年、24年の論文にはシュレーゲルのマイスター論の影響が色濃く反映されていくからである。

19世紀初頭にそれほど有名ではなかったモルゲンシュテルンが今日でも知られている理由は、1961年にフィリッツ・マルティーニが再発見して紹介したからである—Bildungsromanという用語の今日確認出来る最初の使用例として。<sup>xix</sup>

ここまで18世紀後半の文学におけるBildungの問題を論じたテキストを概観してきたが、このテーマが当時ここに紹介しきれなかった多くの論者によって扱われ、高い関心を集めてきたことは容易に推察できるであろう。ヘルダーやシュレーゲルによって小説が近代の代表的な文学形式であると主張されるようになってからは、小説におけるBildungが論じられることが当然のように予測され、そしてその予測通りにBildungsromanという複合語の誕生がモルゲンシュテルンによってなされたことが確認できるのである。

このように、シラーとシュレーゲルの論争は、2人の間で注目してみるならば新旧論争の体裁を取っていたが、小説理論の展開の流れの中に位置づけてみると、シラーの小説への否定的な立場を読み取りことができる「素朴文学と情感文学について」が、シュレーゲルを経由しつつ、Bildungsroman理論にまでつながる過程が浮き彫りになってくるのである。そうした意味で、

Bildungsroman理論は18世紀的な文学観、文化観の混成と総合によって構成されているといっても過言ではないだろう。ヘルダーが小説を普遍文学Universalpoesieと表現したことがシュレーゲルの小説理論にも引き継がれているが、小説がさまざまなジャンルを複合しているように、小説理論も、非小説理論や反小説理論さえ取り入れて発展して来たと言えるのである。このような経緯から、小説理論を文化論の普遍的類型Universalgattungとしてとらえることが可能であろう。これが本論の結論であり、同時に次の課題への問題提起である。

本研究は科研費の支援を受けて行われたものである（[課題番号] 26770115 / [研究種目] 平成26年度 若手研究 (B) / [研究代表者] 北原寛子 / [研究課題] 18世紀から現在にいたるBildungsroman概念の展開に関する文献学的研究）。

- 
- i 本論は、日本独文学会秋季研究会（2014年10月12日、於京都府立大学）における口頭発表「普遍的類型としての小説理論?—Fr. シュレーゲルの小説理論における小説反対論の影響について」をもとに、会場での議論をふまえて改稿したものである。
- ii Vgl. Hans Eichner: F. Schlegel's Theory of Romantic Poetry. In: Publication of the Modern Language Association, 71 (1956), S. 1018–1041. 田中均著『ドイツ・ロマン主義美学—フリードリヒ・シュレーゲルにおける芸術と共同体』御茶の水書房 2010年。小林信行「Fr. シュレーゲル: 増大する美の理念: Studium-Aufsatzの思想圏 (その3)」明治大学経営学部人文科学研究室『人文科学論集』(59)、2013年3月 1–10頁。Thomas Schirren: Die Entstehung der Romantik aus dem Geiste der Kritik: Schlegels "Philosophie der Philologie" als Ursprung der Universalpoesie (特集 Das Krisenbewusstsein zur Zeit der Romantik und Utopievorstellung). 19世紀学学会『19世紀学研究』(7) 2013年3月 61–81頁。Wolfgang Braungart: Jedes Werk wie eine neue Schöpfung von vorn an aus Nichts. Utopie-Reflexion, Subjekt-Konzept und Poesie im "Altesten Systemprogramm des deutschen Idealismus" (1795/96) und in Friedrich Schlegels "Rede über die Mythologie" "Gespräch über die Poesie" (1800). 19世紀学学会『19世紀学研究』(7)、2013年3月 33–50頁。武田利勝「無限循環するモノダの歩行—フリードリヒ・シュレーゲルの「特性描写」の概念について」駒澤大学総合教育研究部外国語第1・第2部門『駒澤大学外国語論集』(7) 2009年9月 27–49頁。中村美智太郎「ドイツ・ロマン主義と美的革命の精神: フリードリヒ・シュレーゲルとシラーにおける「分断」と「統合」の問題」一橋大学『言語社会』(3)、2009年3月 317–330頁。永川聡「Fr. シュレーゲルの初期ロマン主義的転回」明治大学人文科学研究所「明治大学人文科学研究所紀要」(61)、2007年3月 151–167頁。
- iii Friedrich Schlegel: Studien des klassischischen Altertums. Eingel. u. hrsg. von Ernst Behler. Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe (= KFSA) Bd. 1: Abt. 1. München Paderborn, Wien 1979.
- iv Vgl. Rudolf Haym: Herder nach seinem Leben und seinen Werken. Bd. 1.2. Berlin 1877–85. Hier Bd. 2, S. 634f.
- v Johann Gottfried Herder: Briefe zu Beförderung der Humanität. Hrsg. von Hans Dieter Irmscher. Werke in zehn Bänden. Bd. 7. Frankfurt am Main 1991, S. 548.
- vi Friedrich Schiller: Philosophische Schriften. Tl. 1. Hrsg. von Benno von Wiese. Nationalausgabe (= NA) Bd. 20. Weimar 1962.
- vii シュレーゲルは単純に古典古代を賞讃したのではなく、近代文学にも通じる文学の規範をそこから引き出すようとしているという考え方も提唱されている。Hans Eichner: The Supported Influence of Schiller's Über naive und sentimentalische Dichtung on Fr. Schlegel's Über das Studium der griechischen Poesie. In: Germanic Review, XXX (1955), S. 260–264. Richard Brinkman: Romantische Dichtungstheorie in Friedrich Schlegels Frühschriften und Schillers Begriffe des Naiven und Sentimentalischen. In: Deutsche Vierteljahrsschrift. 32. Jahrg. (1958), S. 344–371.
- viii Johann Christoph Gottsched: Versuch einer critischen Dichtkunst. Unveränderter photomechanischer Nachdruck der 4., vermehrten Auflage, Leipzig 1751. Darmstadt 1962, S. 114.

- ix Vgl. Jean Paul: Vorschule der Ästhetik. In: Jean Pauls Sämtliche Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Erste Abteilung. Elfter Band, S. 204.
- x J. Ch. Gottsched, a. a. O., S. 167.
- xi Friedrich von Blanckenburg, Versuch über den Roman. Faksimiledruck der Originalausgabe von 1774. Mit einem Nachwort von Eberhard Lämmert. Stuttgart 1965, S. 252.
- xii Ebd., S. 288f.
- xiii Ebd., S. 442.
- xiv Vgl. NA XX 462.
- xv シラーが小説に批判的な立場を取ったという主張については、以下の拙論で論じているので、そちらをご参照願いたい。Vgl. 拙論「歴史は小説になることなく文学的たりうるか —18世紀の小説論争とシラーの「歴史」と「物語」—」小樽商科大学『人文研究』(127) 2014年3月 119–150頁。
- xvi Karl Morgenstern: Über den Geist und Zusammenhang einer Reihe philosophischer Romane. In: ders. (Hrsg.), Dörptische Beyträge für Freunde der Philosophie, Literatur und Kunst 3, 1. 1816 (1817), S. 180–195. Rolf Selbmann (Hrsg.): Zur Geschichte des deutschen Bildungsromans. Wege der Forschung Bd. 640. Darmstadt 1988, S. 52.
- xvii Vgl. NA XXII 246.
- xviii K. Morgenstern, a. a. O.
- xix Vgl. Fritz Martini: Der Bildungsroman. Zur Geschichte des Wortes und der Theorie. In: Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. 35 (1961), S. 44–63.